



引越し顛末記



—信じられない五つのこと—

多谷 昇太

(一) 車上生活

平成三十年六月十五日、10年間住んでいた横浜市内の公営住宅から丹沢山脈ふもとの、旧雇用促進住宅だった団地へと引越して来た。最上階、5階の角部屋であることばかりを頼りに、這う這うの体で引越して来たのだった。かく云うわけは公営住宅における過去10年間の生活が余りにもひどかったからだ(その前も…)。どういうことか、逐一記していこう。

前の公営団地もやはり5階建てで私はその4階の部屋に住んでいた。ところがその部屋のまわりグルリ四部屋をヤクザ風の住人たちに囲まれていて、わけあって(のちほど詳述)私は、朝・昼・晩、一日24時間、一年365日を彼らの立てる騒音や罵り声のうちに過ぎざるを得なかったのだ。特に真上の5階の部屋に入り込んだチンピラとその女がひどかった(こいつらは正式な住人ではなく、そこに

住んでいた50過ぎの女が又貸しをしたのだった)。ドスドスドスと床を踏み鳴らし、小型ジェネレーターと思しき機械を部屋に持ち込んで、およそ耐えられないほどの騒音と振動を立てまくる。このチンピラアベック始めまわり4部屋の住人たちは誰も仕事をしておらず、私への有形無形の生活妨害を、就中睡眠妨害をメインとしてひたすら続けるばかり。まるでそうすることが彼らの仕事でもあるかのようなのだ。このような毎日の中では私は致し方なく表、公園で寝るとか、ネットカフェやカラオケ、あるいはドヤ街の木賃宿で眠るとかして、なんとかみずからをごまかさざるを得なかった。彼らをかわけながら、途切れ途切れではあっても仕事に就いてきたが、まあ寝不足で体力が続かず、そのきつかったことといたらない。実に地獄のような毎日だったのだ。挙句平成23年から24年にかけてついに私はたび重なるイライラや、それから逃れるための大量の喫煙、はては自棄的な飲食不摂生などのために胆管ガンとなり、延々9時間におよぶ手術を東海大学付属病院で受けることとなってしまった。その結果は同病院が病症部位に合わせて司司に分かれ、特化しており、胆のう・すい臓・十二指腸あた

りのガンを専門とする、内科外科のエキスパートの先生の執刀を受けることができて、文字通り、助かったのだった。しかしそのために半年間を入院に、あとの半年間を通院と養生についやしてしまった。ところでその病院への手配も、また入院中の世話も、たったひとりしかない私の姉がすべてしてくれた。男三人女一人の四人の子供たちを、いくつもの仕事を掛け持ちなどすることによって女手ひとつで育て上げた人だ。仕事の掛け持ちのためにバイクで移動中、疲労困憊のあまり失神して道路に投げ出され、救急車で運ばれたこともあると聞く。ところがこの私ときたら生涯を呑気な独り身で過ごして来たあげく、(今から6年前の当時)還暦の年令になってまでこのような迷惑を姉にかけてしまったわけだ。人からどんなに云われても云い訳できないが、しかしこんなでいたらくに至ってしまった直接的なわけを、ここでどうしても記しておかねばならない。

つまりなぜ、このようなヤクザ染みた者たち(たぶん本当のヤクザ)に囲まれ、実に17年間におよび彼らのストーカー行為と生活妨害を受けることになってしまったのか、のみならずいまも受け続け

ているのか、ということである。話は17年くらい前にさかのぼる…。

17年前私は横浜市鶴見区にある1DK8世帯のベランダ形式のアパートに引っ越して来た。丸々一棟を近くにある土木会社(か解体屋)の寮としているようなアパートで、一般の住人は(おそらく)私一人ではなかったかと思う。単身者もいれば夫婦者もいたがしかし夫婦者とは云っても勝手に女を連れ込んでしまうような、管理のいい加減なものだった(か、あるいはオーナーの許認可まかせだったかも知れない)。ニツカポツカを穿いた物騒な兄ちゃんや中年男らが入り出している光景を見て、「これはえらい所に来てしまった」とほぞをかんだがあの祭りだった。実はその前のアパートもこれと同じような環境で、そこでえらい目に会って越して来たのがこれだったからだ。なにこともなければいいがと願いつつ愛車のポン太(中古で購入した軽のワンボックス、キャブが狸面していたので命名)を駆って毎日の仕事へと通い始めた。勤め先は川崎の東扇島、フオークに乗りながら倉庫の管理をしていた。引越し当初は夜寝る時になると家では寝ずに、表に行つて車の中で寝ていた。なぜそんなことをしたか

と云うと、若い時からずーっと止められないタバコのせいで口腔内が荒れ、就寝当初はすさまじいイビキをかくからだだった。以前の住まいも、その前も、さらにその前も、ひんしゆくを買ったのがこれで、その原因だったタバコを止めるまではと念じつつ、夜になると表に出かけていたのだ。早朝に帰って来ては身支度をし、勤めに出る。ガソリン代も時間ももったいなく何よりわずらわしかったが、タバコタバコと念じつつがんばっていた。しかしいくばくもなく無体なことがひとつと理解不能なことがいまひとつ出来る。真下の部屋には中年の夫婦者が住んでいたが（私の部屋は2F角部屋）その亭主の方が棒かなにかで天井を叩きはじめ、部屋の中で激しく足踏みをはじめたのだ。さすがに毎日車中泊では身がもたないので週末とかは部屋で寝るのだが、その折りは就寝前に喫煙をしばしやめるとか、あるいはうつぶせで寝るとかしていた（こうするとイビキがあまりしない）。にも拘らずおっぱじめたわけだ。なぜか私のことを「プータ（プータローの略）」とののしり且つ「おまえのやることはみんな気に食わない」と云ってはそれらのことをし続ける。ちなみに仕事から帰って私のやることと云ったら油絵を

描くこと（若い頃から描いていた。イーゼルもあつた）、小説や和歌を執筆することだった。あとは英語をものにしたくてNHKラジオ英語講座等のテキストを音読していた。それらが一切合切彼の気に食わないということらしい。英語や絵は音と匂いで気づいたかも知れないが小説となるとわからないはずだ。しかしその執筆表現の内容などを女房と笑ったりしている（安アパートで声がほぼ筒抜けだ）。ハハアとしかし私はすぐに合点した。「霊視だな」と。40代前半ころまで霊視などということは私はまったく知らなかった。そこに壁があるうがなにあろうが、彼ら霊視者にとつてはまったく障害とならない。こちらが「読み」「書き」「する」ことはすべてお見通しの上、さらに、である。こちらが思うことまで感得するらしい。「そんな馬鹿な」といまだ独身等でなにも知らない人は云うだろうが、それならぬ夫婦者たち（つまり大半）の間ではむしろ暗黙の常識と化しているようだ。そのわけは男より圧倒的に女に霊視者が多いからで、結婚後に多くの男たちはそれを知らされ、納得するのだろう（女性は懐妊するので多分に四次元的だからと想像している）。つまり大半の人々の間では「霊視なんて」云

わずもがな」ということである。ちなみに靈視とは透視等の超能力とは違って、憑依に近いものだろうと思う。つまりは憑く相手の目を通して見、感じていくわけだ。これなら壁も何も障害とならないわけである。とにかく件の夫婦者の女房がそれで、私の逐一を亭主に教えその野暮天が「気に食わない」となったわけだろう。しかしそのことが私には無体ということ、その次に起こったこと、こちらの方はまったく理解不能なことと云える。こちらも入居以来いくばくもなく起こったことだが、私の隣の部屋のドアを誰かが思いつき蹴飛ばすのだ。すると今度は反対に隣の男が出て来て蹴つたと思しき男の部屋を蹴飛ばし返すのである。まず魂消したが、しかし実にこれが、そのアパートにいる間中くりひろげられた。始めつから物騒とは思っていたがまさかこれほどとは思わなかった。蹴り合いの理由は当初わからなかったが、どうも隣室の男（年は40前後）が連れこんだ女をめぐるの、痴話喧嘩のたぐいらしい。想像だが隣室の男が若い女をどこから連れこんでナニをしまくる。それが誰かか、もしくは誰かたちの気に食わなかったらしく、隣室の男と女つまりアベックは、二人だけで孤立してしまったよう

で、いつかな表に出て来ない。仕事に出る様子もなく二人で閉じこもったまま。どうもこのアパートを寮化している××興業の作業員たち全員と、このアベックの対立となっているらしい。ところで私は毎日の食事と勤め先での弁当をママに料理するのだが、そのたびに隣室から「腹減った」等のひとことや壁たたきなどの行為が伝わってくる。意味するところはあきらかでも仕事にも行かないのだから金が無く、飢えているのだろう。援助したいと思わぬでもなかったが何しろほぼ毎日のこの蹴り合いである。正直関わりあいになりたくなかった。するうちに四六時中その隣室から、女から男への「(出て)行けよ」なる声がひんぱんにするようになり、これはたぶん男への愛想尽かしと容易に知れる。思い余って一度真下の夫婦者の騒音立てをアパートのオーナーに訴えに行ったとき、このアベックの窮状をも伝えてみた(また同時に凄まじいドアの蹴飛ばしあいも)。しかしオーナーは「そんなことは放っておけばよい」と一笑し且つ下の夫婦者とは自分でケリをつけるようにと云っていつかな取り合わない。しかしこちらは気が弱いうえに下の亭主始めこのアパート全員××興業の同じ作業員たちだろう

と思うので、そんなことは端っからご免だった。相変わらず夜は車中泊などしながらかわしていたが、しかし今度はどういいうわけか車中泊しているその場所に（月極めしていた駐車場、もしくは公園際、あるいは遠く第三京浜都筑パーキング等）暴走族風の車が隣接して来るようになり、ドアをやたら開け閉めするなどして睡眠妨害を始めた。不思議なことには駐車する場所を変えても、必ずその類の車が現れて叩き起こすのだった。その連中は主に隣室の男と女をめぐって蹴り合いをしていた二人組（当時年令は25、6才くらいだった）とやがて知れる。うち一人は私の二軒隣りの部屋に一人で、いま一人は階下の夫婦者の隣りに、こちらは女連れこんで住んでいたように思う。ふだんから「俺たちは義兄弟」とか「俺たちがヤクザだと知ったらあいつ（つまり私）驚くぞ」などと聞こえよがしにうそぶいては、なぜかアパートオーナーの意向を私に強いるようだった。いったい昼間の、××興業の自分たちの仕事はどうしているのだろうか？なにしろ夜を徹して私を車で追いかけてまわすのだった。時に女をともなあって、である。その女というのが義兄弟のうちの一人の方の女で、これが曲者とやがて知れる。前記

した霊視女の程度のきついやつで、おそらく人間ナビゲーターとでも称すべき正確さで私の居場所を義兄弟に告げていたのだと思う（自身が族だったのだろうか）。畢竟とても追跡をかわし切れるものではなく、やがていくばくもなく私は失業するに至る。その後はバブル後の失われた10年に当たっていたことと、私の年令（50才をこえていた）もあってなかなか正業に就けず、業務請負の会社を間に結構な遊び期間をおいて転々としてしまう（懐具合はドンドンと寂しくなっていく）。さらにはなにしろここから出たかったので、寮付きの仕事を求めて何回か地方に移り住んだ。しかし信じられないだろうがその行く先々において件の男二人プラス女人（？か二人）が私を追って現れるか、もしくは寮に住まえばこいつらとは別の人間が隣室に入り込んで来、こいつら同様に私を叩き起こすのだった。畢竟仕事が続かず、移動のための出費ばかりを費やして、いくばくもなく、危ない「アパートへと舞いもどるしかなかった。そのたびに件の真下の夫婦者があざ笑っていたが、しかしそうこうするうちに今度はその夫婦者の部屋で騒ぎが起こる。伝わってくる感じでは亭主がどうしても私をこのアパートから

追い出そうとする余り、どうも仕事にも行かなくなり、四六時中の騒音立てに徹しようと部屋にこもってしまつたようだ。すると銭が尽きたのだろう、かつての隣室同様に（いやもつと激しく）私が食事を作り出すと、それこそ凄まじい勢いで部屋の中で足踏みを始める（震度3くらいだったか）。そんなバカを続けるものだから女房が出て行こうとしたらしく、しかしその時にさらにバカをしでかしてしまつたようだ（詳述不能）。その反対にいつの間にか隣室の窮乏と蹴り合いは終わつたようで壁を鳴らす音もしなくなつた。意味するところは女が男を乗り換えたのだろうか？知らず、である。興味もない。それどころかついに私の方の窮乏が極まつて来て、家賃も払えなくなり、またそれよりなにより、この気違いアパートに心底嫌気がさして、ついに私はここを引き払って車上暮らしを始めることとなる。階下の亭主の念願成就という次第だつたらう。

その後私はなけなしの金で性懲りもなく埼玉県は田沼町などに行つたりして、寮つきの仕事を求めたがうまく行かず（例のアンビリーバブルな追跡があったのと、目がすっかり悪くなつていた。下の亭主の睡眠妨害をかわそうとして耳に粘土を詰め込

んだり、さらにその上からヘッドフォンをして音楽を鳴らしながら寝たりしているうちに、眼中で黒い星が光つた。つまり内出血したのであり、しかしすでに保険証もなくなつていてほつたらかしている内に目がかすむようになってしまつた。ついでに耳も、内耳炎が嵩じて左耳がほとんど聞こえなくなる）、横浜方面に帰るためのガソリン代も尽きてしまふ。万策尽き果てて実は私はここで久しく音信を絶やしていた姉に無心の電話をかけたのだつた。例の矢切の渡し場辺りからのことで、前記した胆管ガン手術の前にもこのように、ていたらくの極みの内に助けを求めていたのである。その折りは「止んぬるかな」そのものの心境だつた…。

この後姉のおかげでなんとかこちらに舞い戻つた私は川崎市内の時間貸し駐車場に居を定めた。つまり愛車ポン太とともに朝そこから出勤し、仕事が終わるとそこに帰つて来て車中泊を続けたわけだ。前記矢切りの渡し場の「止んぬるかな」を経験したからには、ここで得た仕事（川崎職安がほぼ隣接していてこの紹介で羽田は京浜島におけるゴミ処理施設での仕事を得ていた。車上暮らしは告げずに前の住所を告げていた）を決して止めるわけには行

かずとにかく頑張り通した。おかげでまたアパートを借りれるほどのお金がたまり、私はやっとまた畳の上での暮らしを始めることができた。平成17年のことである。都合半年ほどの車上生活だったろうか。この手記をお読みくださる方がいたとして「それはめでたし、めでたし」と思っていただけか、あるいは「なんとまあ、みっともない顛末記だ」と思われるか判らないが、実は、悪魔の追跡、はこれで終わりではない。冒頭サブタイトルの「信じられない五つのこと」はこれ以降、実にここから、私の身のまわりで展開されるのだ。横浜市港南区に借りた2DKのアパートに、やつら、が待っていた…。



ひとり来ぬ矢切の渡しつれあいは悲しびとふ名の
孤独女なりき ※現地詠、夜の暗闇の中で詠む